
勇者な友人と××な俺。

鍵屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者な友人と××な俺。

【Nコード】

N8143U

【作者名】

鍵屋

【あらすじ】

人間のほかに魔族がいて、暗躍したりする世界。そんな世界で生きる、諸事情から王都に行くことになった友人と、それについて行くことになった俺の話。

※注意…いわゆる王道です、誰がなんと言おうが王道です。ついでにチートです。それを念頭においてお読みくださいませ。

1. 旅立とう、世界の果てから

俺には親友と呼べる友がいる。

淡い金色の髪と深い青の瞳をしたそいつは、幼い頃から可愛いだの綺麗だの愛らしいだの言われながら育ってきた。つまり幼い頃は間違いなく女の子に間違えられるような容姿だったわけだ。

幸いにも俺らが暮らす村は田舎も田舎、隣村まで大人の足でも朝早くに発って日が沈む頃にやっと着くといった辺鄙な場所にあったから、村がひとつの家族みたいなもんで村中がそいつが男だと知っていた。

外の世界と隔離されたような村で、新しく入ってくる者も出て行く者も滅多にない。そんな村だから俺もそいつも、なんの疑問もなく家の仕事を継ぐもんだと思っていたわけだ。

が、転機ってやつは突然訪れた。

俺とそいつが六歳の時、村外れの森に魔物が現われた。それも一頭や二頭じゃなく、群れて。聞いた話じゃ、三十頭は軽いくいたらしい。

しかもその魔物の群れが現われた原因は、魔族が呼んだからだというし。

魔物に対する対策なんて何もしてなかったうちの村はありったけの木材で簡単だけでも柵を作り、居なくなるのをただ待つという日々が暫く続いた。

そんな俺たちの村を救いに来たのが、勇者様御一行。まあ後で知

った話じゃ、そもそも魔族がうちの村に来たのは彼らが仕留めようとしたけど力足らずに逃した、ってのが事実らしいけど。

それはともかく、勇者様御一行はその魔族を討ち果たし魔物の群れも駆逐した。

勇者様、この村を救ってくださってありがとうございます。

事実を知らなかった俺たち村人はそう言って勇者様御一行に村をあげて感謝した。で、飲めや歌えやの大騒ぎ。

で、そんな中で起こったのが転機。

勇者様御一行の中でも一番年下の、なんとかって神に仕える神官が酒が入った勢いで言ってくれたのだ。

君がもう少し大人だったら口説いて都に連れて帰るのに、と。

言った相手は俺の友人。つまりは男。神官も男。

村人は一斉に黙り込んだね。何言ってんだこの阿呆って、俺は幼心に思ったね。

それに本当は女の子だったとしても、六歳だよ？ 明らかに怪しい趣味とは思えないし、一番若いっていても二十代半ばくらいの年だったし。

だけど勇者様御一行は酒が入っていたためか村人の様子が変わったのにも気付かず、大きな声をあげて神官を叩いたり冷やかしたりと忙しい。

子供を持つ親はもう遅い時間だからって、それとなく子供たちを家に帰し始めた。それにも気付いてないみたいだった。

最初意味がわからなかったそいつは自分が女の子に間違えられたということに気付くと、顔を真っ赤にして涙を堪えてその場を逃げ出した。

自分の容姿の美醜なんて気にしたことがないそいつでも、自分が女の子みたいな容姿だったのは理解してたんだと思う。童顔で可愛らしいっておばさんに良く似てたから。

逃げた先は広場から一番遠い俺の家。

納屋で稲藁に埋もれながら涙を堪えるそいつ。一緒に風呂に入ってた仲だからそいつが男だったのは百も承知なんだけどさ、ほんのちよつと、女の子だと勘違いした気持ちもわからなくもないなって思ってしまったって――心底反省した。

隣に座って、背中を撫でながらそいつを慰める。

お前は立派な男だ。その内お父さんみたいになるさ。あの神官が馬鹿なんだ。

思いつく限りの慰めの言葉を言ってる内に俺らは眠くなって、気が付いた時にはベッドの中にいた。いつの間にそうしたのか、手を繋いで。そのままってことは、どうやら俺たちは手を離そうとしなかったらしい。
びっくりだ。

勇者様御一行が旅立った後、そいつは俺に宣言してくれた。

お父さんから剣術を習って男らしくなるんだ、と。

おじさんは一度村から出た人で、なんでも冒険者をしていた頃があるらしく、村じゃ唯一と言っても間違いじゃないまともに戦える人だった。

俺たちはおじさんの冒険の話を聞くのは好きだったけど、俺たちは村から出はしないんだろうって思ってた。だから鍛える必要はないと。おじさんもそれでいいと言っていた。

だけどあの神官のひと言で考えは変わったらしい。身を守るためには最低限の力も必要だと。

大人になれば少しはおじさんにも似てくるだろうけど、このままお婆さん似だった場合も考えたんじゃないかって、今の俺なら思う。ついでにその心配も。

そんな訳で剣術を習い始めたそいつ。

おじさんの子だけあって素質はあったらしく、十二歳になる頃にはおじさんから三本に一本は取れるようになった。その頃には可愛い綺麗とはいっても女の子に間違えられることもなくなり、それに男らしくなった。

あんな一件があったにも係わらず、性格はまっすぐに育ったし。むしろ自分が嫌な目にあったせいかな、そういう目から人を守ろうとする正義感の強い性格に育った。

俺としてはそんなそいつが親友だったのは誇らしい限りなんだけど、素晴らしすぎるのも考えものなんだって事に、今更ながら気が付いた。

＊

「ユーニス、お前はこの村の誇りだ。この村の出であるということ
を念頭において、恥じぬ行動をとってほしい」

「はい！ 心得てますっ！！」

そいつこと親友――ユーニスは期待と希望に目を輝かせながら、
むらおさ村長の言葉に大きく頷いた。

ユーニスもユーニスなら、村長も村長だ。ユーニスの性格がわか
ってるんだから、あんまり言う逆効果だってわかってるだろうに。
それともそれすら忘れるくらい、村長も高揚してるとか？

……ありえそうで嫌だなあ。

「ニック、お前はユーニスの共として行くんだ。
それを忘れずに、ユーニスの足枷になることなく支えてやるのだ
ぞ」

「……はいはい、わかってます」

対する俺は、未だにこの状況を理解したくなくて少し投げやりに
返事を返す。

気が付いたら自分の部屋のベッドで目を覚ましてて、ああ最悪な
夢を見たんだって笑えるんじゃないかって気がしてる。

そのくらい、今の状況は俺にとっては不本意だった。

「アドジーちゃん！

ニックにその言い方はないよ。ニックが俺の足枷になることなんて、絶対にないんだし！」

俺が気のない返事をした理由を、村長に言われた内容を気にしてだと勘違いしてくれたらしいユーニスが声を荒上げて言う。

ユーニスはどうも、俺のことを過大評価してるらしい。村長の過小評価とどっちがマシかって悩むところだけど、無理難題を押し付けられる可能性のない過小評価のほうが俺としてはありがたい。

「ニックは確かに運動神経はすこぶる悪いけど、それを補って余りあるだけの頭脳の持ち主なんだって知ってるだろ。クゼじーちゃんのとこだけじゃなくてもっと知識が豊富な場所——ムロウゼがサヴァに行かせたほうがいいって相談してたことは俺だって知ってる。

俺がニックを従者に選んだのは、ニックを王都に連れて行きたいってのもあったんだし」

「それはそうだが……」

ユーニスの言葉に村長は口ごもる。

ムロウゼもサヴァも、この村から結構離れた場所にある都市の名前。

ムロウゼは薬師の街として、サヴァは医師の街として知られている。更に遠い王都とは比べ物にはならないけれど、この辺りの人たちからすれば最高の治療が受けられる場所。

俺を育ててくれたじーちゃんが薬師だったのもあって、俺も薬師になるだろうことを期待されてた。俺も薬師になってもいいかなって思ってたし。

で、じーちゃんの知り合いに預けて修行してきたらどうだって話があがってた。

「俺について王都に行ったら、ニックには最高の教育をさせてやれる。剣を振るうだけしか能のない俺と違って、ニックには才能があるんだし」

「ユーニス、俺は気にしてない。それに俺はそんなに頭がいいわけじゃない。」

薬師の件ならじーちゃんが元気な内に戻ってこればいいんだし、じーちゃんなら余裕で二十年は平気だ」

語気を荒上げながら語るユーニスを宥めながら、その過大評価を否定することも忘れない。

俺が坂道を登れば転げ落ちるとまで言われる運動オンチなのは本ただけども、それを補えるほど頭がいいとは思えない。物心ついた時から叩き込まれてる薬草の知識だけは一人前だとじーちゃんに認めてもらえてるけど、なにぶん経験が少なすぎる。

知識量だって、頭の回転だって、田舎なこの村じゃ一番でも世の中にはもっと上がいるっての知ってるし。

「ニックはもっと自分に自信を持っていんだ。」

都から来た使者だって、お前の知識量と頭の回転のよさは誰でもじゅうぶんに誇れる程度だって言ってたじゃないか」

頬を膨らませ、年相応の表情を浮かべて拗ねるようにユーニスが言う。

ああ、そうだ。あいつを助けたりしなけりゃ、ユーニスが王都に行くことにならなかったんだ。ただの旅人じゃなくて王の使者だとわかってたなら助けたりしないで獣の餌にしてやったのに。

思い出したらムカついてきた。

「アッフエ、オーリル、ミズリカ、シズリ……」

気持ちを落ち着かせるために、筋肉弛緩効果のある薬草の名前を
呟く。

多くを摂取すれば身体の自由を奪い死にも至るそれらを、どの割合で混ぜるのが一番効率がいいか考えながら。

「ニ、ニツクや。」

お前がユーニスの足枷になどなるわけがないのはわかっていると
も。お前も村の誇りだとも」

俺の様子になにを勘違いしたのか、村長は慌てた様子で俺を宥めてきた。その顔が青褪めている気もする。

村長も年だからな、じーちゃんに薬を処方してくれるように伝えておいたほうがいいかも知れないな。

「俺のことは気にしないでいいんで。」

マゼルカ、モールト、それからビルシア」

精神を安定させる効果のある香草^{マゼルカ}、安眠効果のある薬草^{モールト}、それから栄養剤として知られるビルシアのエキス。村長に薬を処方するならこんなところかな。

ああ、どれも毒薬として有名なものばかりだから量に注意するた
めにも定期検査が必要になるか。

「ユ、ユーニスっ！」

更に慌てたようすの村長がユーニスの名を呼ぶと、何かを心得た
様子のユーニスが俺の顔を覗き込んできた。

「落ち着け、ニック」

深い青の瞳が俺を見る。澄み切った空の青じゃなく、海という塩水で出来た巨大な湖の青だという瞳。それが俺の目の前にあった。

「サードニクス《……………》、答えろ。

ルセニ草の効能は？」

「ルセニ草。

そのまま生葉を傷に張っても止血効果があるが、揉んで患部に貼れば汁が皮膚から吸収されて筋肉の疲れにも効果がある」

ルセニ草はこの辺りには普通に自生している野草で、この村の住人なら子供でも知ってる生活に密着した薬草。面白いように皮膚にくっつく性質があるから、ぺったり草と子供の頃は呼んで、遊んだ記憶もある。

俺もユーニスも――。

そこでやっと、はっと我に返った。ユーニスの顔を見つめたまま幾度か瞬きを繰り返すと、それにほっとしたのか笑顔を浮かべて俺から顔を離す。

愛称じゃなくて本名をユーニスが呼んだってことは、また、やってしまったってことだろう。

最近感情が高ぶると自制が利かなくなることが多い気がする。一見して異常だとはわからないんだが、とことん非情になれるらしい。……反省しなければ。

「ユーニス、済まない」

小さく謝ると、気にするなどでもない風にユーニスは微笑んでくれた。

じーちゃんの言葉をそのまま使うなら、真っ直ぐ過ぎて融通の利かないところのあるユーニスを抑えるには俺が一番だし、感情が高ぶって自制が利かなくなった状態の俺を鎮めるにはユーニスが一番らしい。

俺とユーニスは薬瓶の瓶と蓋だと、仲の良い夫婦を示す言葉まで使って説明してくれた。

「ふたりとも済まなかったな。

ニックや、王都に行けばムロウゼやサヴァとは比べ物にならない知識と物があることだろう。それを吸収してくるといい。

それからユーニスをよろしく頼むな」

「はい、ユーニスは俺がしっかり見張っておきます」

ユーニスの件に関しては俺に異論はないから素直に頷く。

迷惑度で言えば俺の自制が利かなくなった状態よりもユーニスが猛進するほうが被害が大きい。俺のは所詮、悪人に人権はないだとか不相応な優しさを振りまかないといった程度だし。

ユーニスは……頭ん中？正義の勇者サマ？になるからなあ。

「ニック、俺はもう子供じゃないんだけど」

「だったら後先考えずに施しほしをしたり、自分のやらなきゃならないことを放って人助けに走ったり、自分の力量を過信したりするなよ。後は物事を断るときは相手を傷つけることは仕方ないと諦めてはつきりと拒否の旨を伝えること。でないと相手に期待を残すことになるんだからな。

それから……」

ああ、多すぎてどれから注意すべきか悩む。

俺が言ってるこの全部を、ユーニスは既に実行済みだってんだからやるせない。

「わかってるよ。」

でもさ、俺が施しすることでその子は一時でも助かるんだし、もしかしたら俺のすべきことよりもその人のことのほうが重要なことかも知れないし。

それから男には無謀だとわかっててもやらなきゃならないことがあるって父さんは言ってたし」

口ごもるようにユーニスは反論してくる。

こういうときばかりはユーニスの容姿もこれでよかったと勝手に思う。

これが鍛冶屋のオルドみたいに筋肉隆々の男だったら、問答無用で毒を盛ってただろうから。まだ美少女の面影が残るユーニスだから我慢できるんだよな。

「ユーニス」

ため息を隠しながら、俺は手をユーニスに突き出す。

俺の行動の意味を正確に理解したユーニスは腰の皮鞆から小銭が詰まった皮袋を俺に差し出した。

いつも以上にずっしりとくるその袋の中から、数枚の硬貨を残して後は抜き取る。残ったのは軽く飲み食いしたら無くなる量。これ以上をユーニスに持たせると、ろくなことがない。

この金で王都まで馬車を乗り継いで行く間食いっとながなきゃなら

ないんだ。だからユーニスの悪い癖で失ってしまうわけにはいかない。

足代が無くなったって、王都に行かなくてすむならそれでもいいんだけどさ。そうなるわけがないのは想像がつくし。

王都に行くことは未だに納得出来てないけど、ユーニスひとりで行かせなくて済むことはほっとしてる。

運動オンチな俺と一緒にであればユーニスはあまり無茶はしないし、財布を俺が握ってれば無駄な出費も抑えられる。

もしユーニスひとりで王都に行く、なんてことになってたらと思うと胃が痛い。

「ユーニス、ニック、村長との話は終わったかい？」

後でマゼルカを混ぜて作った飴を舐めておくべきだろうか。

なんて俺が思ってるそこに、ムーロおじさんが顔を出した。ムーロおじさんは工芸品を作る傍ら、近くの町にこの村の工芸品や作物を納めた帰りに町から荷を仕入れて来てくれる――田舎すぎて行商が減多に來ないこの村では欠かせない仕事をしてる。

今日はそのついでに、ユーニスと俺を荷台に乗せてくれることになってた。大人の足でも日中全部かかる距離でも、馬で行けば早い。日が高くなりかけた時間だけど、日が暮れるまでにはたどり着ける。

俺とユーニスがちらりと村長を見ると、村長は頷いて見せた。

もう話は終わったということだろう。まあ、これまでも散々話を聞いてきたわけだし、今日は出立前の激励だけの予定だったんだし。

もう十分だよな。

「はい、終わりました。ムーロおじさん、よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げたユーニスの隣で、俺もつられて頭を下げる。

「ついでだから気にすることはないよ。

外じゃみんなが今か今かと待ちくたびれてる」

苦笑混じりにムーロおじさんに言われ、きつと総出で見送ってくれるつもりでいる村のみんなを想像してこっそりため息をつく。

ユーニスとはかく、俺にも過剰な期待を寄せてくれるんだ。まったくもって嫌になる。俺は普通に暮らしていければそれで十分なのにさ。

「ふたりとも、身体には重々気を付けるんだぞ」

戸口をくぐろうとしたユーニスと俺に、村長は最後とばかりに声をかけた。

そんなこんなで、俺とユーニスは生まれ育った村から出ることになった。十五歳の、春のことである。

2. 王都に向かう、その道程で。

村近くの町でムーロおじさんと分かれた後は、薬師都市ムロウゼ行きの商隊を探した。

俺はともかく、ユーニスはへたな傭兵よりも強い。だから商隊に同行させてもらう代わりに、何かあった時の護衛をするという約束で格安で乗せてもらう。

ムロウゼ行きは簡単に見つかって、翌朝に出立。

乗せてくれたのは気の良い壮年の夫婦で、ムロウゼに薬を仕入れに行くところだと言う。

この夫婦が暮らしている村にも一応薬師はいるらしいが高齢で後継者もなく、薬師組合に村に来てくれそうな人を一緒に探しに行くのだという。

その話をきいて、うちの村は恵まれていると思った。

じーちゃんはまだまだ元気で、後継者には俺がいる。じーちゃんが手塩をかけて育ててる薬草があるから余程珍しいもの以外は村で揃うし、じーちゃんでもなくても薬に詳しい人はまあいる。

……考えれば考えるほど、俺が駆け出しの薬師ですとは言えない状況だった。

おじさんと一緒に御者台に乗ってるユーニスが時折何か言いたげに振り返ったが、無視を決め込んだ。

町に向かう馬車の荷台でユーニスに約束させたことのひとつに、俺やユーニスの素性を容易にばらさない、というのがある。王都に向かうのが最優先だからと誤魔化したのが、言わなきゃ絶対に厄介事に巻き込まれてたはずだ。

今回であるなら……この夫婦の村に行ってくれる薬師を見つけるという、厄介事に。

町程度ならともかく、村に住み着いてくれる薬師となるとまず無理だ。普通は資質のありそうな若者を村の薬師につけて基礎知識をつけさせ、それで大きな町に修行に出す。そうでもしなきゃ薬師なんてもんは村に戻って薬師をしようと思わないだろう。だからだ。

「ニック、本当にあれで良かったのかな」

ムロウゼの入口で壮年の夫婦と分かれたところで、ユニスは複雑そうに言った。

気持ちとは分からないでもない。俺だって知り合いで適当な人が居たなら紹介してやりたい気分になった。

なったが……俺にそんな知り合いはいないし、あの夫婦だけ例外視出来ない。

王都まではまだかかる。次に似たような夫婦と出会った時に、今回融通してしまえば次に見捨てる事が出来なくなる。

「無事に見つかることを祈るしかない。

お前に出来るのはそんなもんだってわかってるだろ」

「そう……だよな」

気落ちしたように肩を落としたユニスに、俺も盛大なため息をつく。

ああ、もう。仕方ない。

「ほら。へこたれてる時間があるなら、王都に向かう商隊を探す。ここから王都に向かう商隊もそれなりにいるはずだし」

先に行けとばかりにユニスの背を押して、俺はその後からゆっ

くり進む。

さて、どうするべきか。

じーちゃんの知り合いにあの夫婦の村まで行ってくれと頼むのはさすがにやりすぎだと思う。俺もそこまで面倒を見てやる気はない。適当な人が居なかったのだろうけど、もっと早い内に手を打たなかったその村の人たちにも落ち度はある。

「あの人に散策のついでに寄ってくれるようお願いしておくのが一番か」

聞いた話ではうちの村よりは町に近く、それなりに特産物があった。人の行き来のある村らしかった。

じーちゃんの知り合いの一人に、珍しい野草探しを趣味にしてる変人がある。当然それで食っていけるはずもなく、薬や珍しい嵩張らないものを売り払ってはその売り上げで生活してる。

「さて、問題はどこにいるか……だよな」

ユーニスを見失わないように気を付けながら、考えつつ歩く。

じーちゃんに頼んでおけば、間違いなく伝わると思う。思うけども……酷い時には数年顔を出さないこともある。助手のトガさんはしっかりしてる人だけど、やっぱり熱中するとそれ以外頭から抜ける人だしな。

常備薬が絶える前くらいには、顔を出してもらえる人なら一番なんだけど。うーん。

「何かお困りですかな」

しゃがれた老婆の声に足を止め振り返ると、物影に店を広げる深く外套を被った小さな人影があった。

ユーニスが商人らしい人と話しているのを見止めて、なら大丈夫かとその人と向き合う。

「ちょっとね。お前に話せば簡単に済む話だけど、それもあまりしたくなくてね。

そんなことより、カーン。なんでお前がこんなところにこんな格好でいるんだ？」

ため息混じりに言うのと、さっきは老婆の声が聞こえたそこからまだ若い男の笑い声が響く。

「今度こそは驚いていただけたと思うのですが、いまいちだったみたいですね。

残念です」

「驚かす気もないくせに、良く言うよ」

未だ外套に隠されたその姿が、老婆などというものでないのは百も承知だった。

このカーンと言う男、俺の父親の古い知り合いだったらしい。それで俺の様子を見にたまに村に顔を出し、村での教育で足りないものを俺にしてくれた人でもある。

そして俺が知る、上には上の良い例でもある。

「聞いてもいいか？」

「ええ、わたくしが答えられることならなんなりと」

慇懃無礼ともとれるほどの恭しい言葉に心の中でため息をついて、

それから二三質問する。

あの夫婦の村の正確な位置、村周りの環境、それから例のあの人の現在の居場所。最後のそれだけは僅かな間があったが、それでもすらすらと答えが返ってくる。

「紙。それから書くもの」

俺の要求にずっと、上質紙と最新式の墨壺内蔵筆が差し出された。

無駄にいいものを使ってる。そんなことを思いながら、手早く手紙を書き綴る。一通はじーちゃんに宛ててで、いまムロウゼに居て問題なく王都に迎えそうな旨とあの人にあの夫婦の村に行ってもらうように頼んだ旨を綴る。もう一通はその人宛てで、あの夫婦の村の位置と環境から珍しい薬草が自生してる可能性があること。そのついでに薬の行商に行つて欲しい旨を綴った。

書き終えて筆を置くと、間をおかずに差し出された封筒に手紙を詰める。

「これ、届けておいて。

それで俺に何の用だったわけ？　ただ様子を見に来ただけなら、わざわざ接触して来ないだろ？」

手紙を懐にしまったカーンを確認して、それから詰問するように強い調子で言う。聞くならきちんと聞かないとこいつのことだ、絶対にはぐらかすだろう。

もつとも、聞いたところではぐらかされないわけじゃないんだけど。

「大したことではありません。」

ただ、例の都からの使者殿と少々確執がございました。そのことをお耳に入れておこうと思った次第です」

確執があったのは確かだが、「少々」じゃないことだけは確かなんだろう。俺にただ忠告をするためだけにこいつが現れるとは到底思えないし。

「わかった、気をつける。それから何かあったら他の誰かじゃなくてお前を呼ぶ」

特に後半の言葉に満足気に頷いたカーンの姿に、俺の推測が間違ってたなかったと悟る。

こいつとの？確執？か。

あの使者は見かけ通りの情けない男じゃないと思ってたけど、こいつとの間に確執がありながら生き延びてるとなると……考えるだけで頭が痛い。

「ニック！　そこで何やってるんだ！？」

額を押さえ、ため息をついたそこにユニスの俺を呼ぶ声がする。顔を上げ振り返るとユニスが俺のところへ駆け寄ってくるところで、そこにカーンがいないことは推測がついた。

カーンはユニスに会おうとしない。

その理由をきちんと聞いたことはないが、なんとなく想像はつく。これも俺にとって頭の痛い事柄でもある。

「なんでもない。

それより、王都に行く商隊は見つかったのか？」

「ああ、見つけた。それで確認のために使者からの書付を見せて欲しいって」

ユーニスが無事に王都に着けるよう、使者は身元を証明する旨を書いた書付と路銀を村に置いていった。

その書付は目端の利く者なら偽物じゃないとわかるだろうものだし、路銀には支度金も含められていて相当な金額だった。

そのどちらも俺が預かってる。

「わかった。それでその商隊はどこに？」

「あっちで待ってる。行こう？」

訊いた俺に、ユーニスは何の躊躇いもなく俺に手を差し出した。

これは坂道を登れば転げ落ちるとまで言われた俺に対する気遣いで、他意はないと分かってるんだが……。

「ユーニス、俺たちくらいの年になれば男同士で手を繋いだりしない。」

俺の心配をしてくれるのは分かってるが、その手は引っ込めろ」

ため息混じりに言うと、ユーニスは俺の言葉が理解出来なかったのか一瞬きよとした表情を浮かべたが、すぐに真っ赤な顔をして手を引っ込めた。

村でそうしてて、からかわれた記憶を思い出したんだろう。わかったならそれでいい。

それに、村では転んでいた俺が外では普通だったんだと……村から出て俺は悟った。

村や町ってのは普通平坦な土地に作られるもので、俺たちの村み

たいに天然の滑り台がそこいら中にあるような斜面に普通はない。酷い場所じゃ、二階分くらいの急斜面に道がある。そんな村を普通に荷物担いだり、走り回ったり出来るほうが特殊なんだ。その証拠に、村を出てから俺は一度も転んでいない。

この事実は、ユーニスが自分で気付くまで黙ってようと思う。俺から言い出したんじゃ、俺が運動神経が悪い言い訳につかってるように聞こえるだろうし。

「それで、お前が見つけたのはどんな商隊なんだ？」

話を逸らすために別の話を振り、商隊が停留場所にしてる街外れの広場にユーニスを促す。

「あ、うん。四頭引きの馬車を何台も連ねてる王都にある大店の商隊でさ、ムロウゼには薬草を仕入れに来てたんだって」

「へえ、そりゃ凄い」

「だろ？ 四頭引きの馬車ってさ、近くで見ると予想以上に大きくて立派なんだよな。」

思わずそれに見入っちゃって、そうしたら商隊を任されてた若旦那が声をかけてくれたんだ」

商隊の責任者と知り合った経緯を聞きつつ、俺はユーニスと広場に向かった。

＊

俺たちを王都まで乗せて行ってくれることになったその商隊は、医師都市であるサヴァを経由して王都まで行くという。

薬師都市ムロウゼと王都を真っ直ぐ繋ぐ街道はあるものの、険しい道となるために商隊があまりそこを通ることはなく、当然の行路だと思う。

使者の書付を見た若旦那は俺とユーニスを客人として迎え入れようと言ってくれたが、それは丁重にお断りさせてもらった。

この若旦那の店がどの程度王都で力を持つのかは知らないし知ろうとも思わないが、王都でのユーニスの立場は微妙なものとなるだろう。そこに変な権力が係わってはろくな事にならない。

その結果、俺とユーニスは護衛……のような、客人のような、微妙な立場として同行することになった。

もし何かあったら手を貸すし、疲れた場合は荷台に乗っても構わないということだ。

そんな訳でユーニスと歩くこと四日。商隊はやっと、サヴァまで三分の二という辺りまで来た。

この商隊は四頭立て馬車が五台、一行は護衛を入れて三十人強という大所帯。護衛や奉公人は必然的に歩きで、そのため進みも遅い。そのことを俺は気にも止めてないんだが……、

「ニック君、無理はしなくていいからね」

「無理だと思ったら素直に言ってよ」

ユーニスと若旦那がふたりして俺に極端に気を使う。それは俺がどこぞの貴族様の御子息だともいう雰囲気だ、俺を？坊ちゃま？

と呼ぶ輩まで出る始末。

これには辟易してる。

「俺なら平気だって何度言えばわかるんだよ、ユニス。

森で迷子になった時より全然歩いてないだろ？ 心配のしすぎだ
ってば」

昼食の汁物をすすりながら不満を隠さずに言う俺を見て、ふたり
は向き合って笑顔で頷きあう。俺を不機嫌にさせて何がしたいんだ
か。

さっぱりわからん。

残りの汁物をひと息で飲み込むと、行儀が悪いと知りながらパン
を口に銜えて立ち上がる。それからユニスに手で断って、街道沿
いに流れる川に向かう。

毎度のことだからと、ユニスは何も言わずに手を振って見送っ
てくれた。ユニスだけなら一緒に構わないんだが、さすがに人
目があるところは避けたほうが無難だし。

川辺に座り込むと、パンを手にとって小さく千切る。すると待っ
てましたとばかりに……どこからともなく、一羽の黒鳥が舞い降り
てくる。

「いつもご苦労だな、クオウ」

声をかけてやるとクオウは小さく鳴いて、伸ばした手に頭を擦り
付けてくる。

このクオウはカーンの鳥で、動く気がないカーンの代わりに俺の
ところに顔を出してくれる。むしろカーンよりも役に立つんじゃない

いかとすら思うほどに、頼もしい。

そんなクオウの足から小さな小筒を取り外し、中から紙を取り出す。

「……今晚、か」

書かれた内容に思わず顔をしかめ、結果起こるだろうことに軽い頭痛を覚えた。

カーンが自ら出張ってくる気はなさそうだから大事にはならないだろうけど、それが俺が無事だという意味だとしたなら……。

「頭が痛い。」

こんなことならユニスがこの商隊を見つけたときに反対しとくんだった」

頭痛の原因は精神的なものだとわかってるし、その原因を取り除く方法もわかっている。

が、それが出来ない以上は耐えるしかない。荷袋からマゼルカの飴を取り出して口に放り込むと、頭痛は心なし和らいだ気がした。

大店の商隊は高く売れる品を積んでいることが多く狙われやすく、屈強な護衛を引き連れていることが多くても、人を集めて襲えば身入りは多い。もしくはその大店に敵対している店が襲わせてしまうとか。

何も起こらなければ楽な行程に違いないのだが、問題が起こればきとはとことん大事になるって訳だ。

「まあ、今更逃げるわけにもいかないし。
クオウ、よろしく頼むよ」

首筋を撫でながら声をかけると、任せてくれとばかりにクオウは甲高くひと声鳴いた。やはりカーンなどとは比べ物にならないほど頼もしく思えて仕方ない。

その力量だけを基準にするならカーンは類を見ないほどに頼もしいのだが、その性格には難がありすぎた。

俺に田舎では手に入らないような高度な教育を施してくれたことには感謝するが、それでもこう、たまに恨めしい気分になる。

「ニック、さっきは少し言い過ぎた。ごめん」

足音を立てずに近付いてきたユーニスに気付いていた俺は何も言わず、無言でクオウにパンの欠片を与える。

別に怒ってるわけじゃない。

気にしてるのはユーニスの後をつけてきた、若旦那の秘書をしていると言った壮年の男。ユーニスが何も考えなく連れてくるわけではないと思うから、俺との不仲でも印象付けておきたいんだろう。

この件についてはユーニスと相談済みで、取るべき行動も決めているし。

俺はユーニスを睨むと、何も言わずに立ち上がる。クオウはそれに驚いたように飛び去り、俺はユーニスに軽く肩をぶつけてすれ違ふ。

「……俺、疲れたから荷台に乗せてもらおうから」

お前と一緒に歩くつもりはないとでも聞こえる調子で、冷ややかに告げる。

「……………ニック」

本当に見捨てられたかのような情けない声でユーニスが俺の名を呼ぶが、聞こえなかった振りで商隊が休んでいる場所に向かう。

思えば、これもいい機会なのかも知れない。

王都に行ってからずっと、俺とユーニスはいままでのように常に一緒にいるようなことも出来なくなるんだろうし。こうやって一緒にいない時間を作るのも、ユーニスのためになるだろう。

少しずつ慣らしていかないと。

「まずは今晚、だな」

ユーニスに任せれば万事無事に片付くだろうが、守るものが四頭立て馬車が五台に人が二十人少し。

その全てを守りきるのはさすがにきついだろう。ともなれば剣の腕ではユーニスの足元にも及ばない俺でも、手伝わない訳にはいかないだろう。それにも気が重い。

3. 新月闇の街道で逢いましょう

月のない夜だった。

俺が生まれる少し前までは月のない夜は魔族が闊歩すると言われ誰も出歩こうとしなかったらしいが、今は魔族の王も倒され魔族たちも大人しいためにこうして商隊は街道を行き来する。

その代わりと言っちゃなんだが、闇夜に紛れて盗賊が仕事をする。どっちにしろ出歩かないのに越したことのない夜って訳だ。

「……………なんだか落ち着かない」

ここ暫く隣にあった熱源がなくて、仮眠を取ろうとしてたのに眠れない。

友達離れが出来てないのはどうやらユニスじゃなくて俺らしい。村じゃ他に年の近い子供がいなかったから、ずっと一緒だったしなあ。

寝るのは無理だと諦め、俺は包まっていた毛布を畳んで隅に置いて馬車から降りる。抱き抱えていた背囊を持って降りることを忘れない。

中身は俺とユニスの王都までの路銀と、使者の書き付け。それから村から持ってきた薬草の数々。

薬草の中には高値で取り引きされるものもあるが、それ以上に劇薬もある。だから手放す訳にもいかないってのが本音。

火の周りで寝ずの番をしてる護衛や奉公人の輪に視線を送ると、やはりユニスの姿はない。ユニスは若旦那と同じ馬車で今日は

休むんだと聞いた。

それが本当だったことにちょっとほっとして、寝ずの番の輪に近づく。

「お、坊ちやまじゃねえか」

俺にいち早く気付いたクルヤが、品のない笑いを浮かべながら声をかけてきた。この人は護衛の中でも一番口が悪いが、一番腕が立つ人でもある。

昨日の晩寝ずの番をしてたから、今日は違うはずなのだが……やはり新月は大人しく寝ていられないってことなんだろう。

「その坊ちやまって呼び方は止めてくれ」

「別にいいじゃねえか、坊ちやまは坊ちやまなんだしよ。」

それより……ユースと一緒じゃなくて寝れないってか？」

にやにやと卑下た笑いを浮かべながら俺をからかう気満々のクルヤに、文句を言うのも面倒だから肯定とも否定ともとれる表情で口を噤む。

嘘でもないし、事実でもない。

「ま、どっちでもいいけどな」

もっとからかってくるかと思いきや、クルヤはあっさりと切り上げ抑えられた焚き火を見つめた。その横顔はだらしなく緩んでいない。

「それはともかく、命が大切なら抵抗しないで大人しくしてろよ。盗賊は荷物は盗っても命は盗らねえもんだからよ」

言って、薪を一本放る。

その言葉にさすがに驚いた。何か起こるかもという感じじゃなくて、盗賊の襲撃にまで気付いていたなんて。

「驚かせたようなら悪いな。」

ほんとはユーニスにも坊ちゃまと一緒に大人しくしてもらいたいんだが……そりゃあ無理だろうなあ。どう育てばあんな風に正義感たっぷりにつんできてくらいだし」

やっぱり血かねえ。

ぼそりと呟かれた言葉は、俺に聞かせるつもりじゃない言葉だったんだろう。だけど田舎育ちで普通以上に耳のいい俺にはしっかり聞こえた。

血ってことは、おじさんの知り合いだってことなんだろう。

おじさんはそれなりに有名な冒険者だったらいいから。それに、名前しか名乗ってないのにわかったってことはおばさんも知ってるってこと。もしかしたら、俺らが物心つく前とかに、村を訪れたことがあるのかも知れない。

口調や態度からユーニスに向ける感情に負のものはわからなかった。

なら、信用しても大丈夫だろう。どう言えばユーニスの邪魔にならずに、ユーニスの助けとなるようにクルヤが動いてくれるかを思案する。

「ユーニスの心配ならいい。ユーニスの剣の腕は師である父親からお墨付きをもらったほどだから。」

だから心配するならユーニスじゃなく、この商隊の人たちを」

緊張を悟らせないように小さく息を吸って、それから言った。ク

ルヤにとって明確に力の証明となるだろう事実を告げ、暗にユーニスの邪魔をしてくれるなと続ける。

俺の言いたいことが通じたのか、クルヤはどこか嬉しそうに笑った。

「身のこなしから相当なもんだとは思ってたが、そこまでとはな。手合わせをするのが楽しみになった。

坊ちゃまの言うのが正しいなら、確かに俺がユーニスを心配する必要はねえな。そもそも俺はこの商隊に雇われた護衛なわけだし、守られる気のねえヤツまで守ってやる余裕はねえしな」

もうひとつ薪を放ったそこに、人の叫び声のような甲高い声が響いた。

「腐肉鳥だな」

クルヤではない、別の護衛が心持ち緊張した声音で言った。

腐肉鳥はその名の通り、腐った肉を好んで食べる鳥の形をした小型の魔物。

とは言っても子供が手を広げた程の大きさがあり、家畜を攫っていくことでも知られている。ちよつとでも腕のたつ剣士なら苦もない相手だが、大抵がもっと強い魔物や魔族と共にいることが多い魔物でもある。

「盗賊の心配をしてたんだが、もっと状況は悪いようだな」

また別の護衛が言って、こちらは抱えていた大剣を杖に立ち上がつて身体を軽く動かす。それにクルヤを初めとする護衛たちが言葉もなく続く。

さすがは大店が雇う護衛たち。と、俺はひとり感嘆する。
使えない護衛を雇ってることはないだろうとは思っていたが、それなりに腕の立つ人たちばかりらしい。

「仕度を終えた者から陣形を整えさせるぞ。

馬は気の弱い動物だ、蹴られないように気をつけろよ」
「わかってるよ」

寝ずの番だった者以外も起きだし、奉公人たちはこの異様な光景に戸惑いを隠せないようだった。

護衛のひとりがその内のひとりに事情を説明し、商隊の指揮をとってもらうために――若旦那と秘書の姿を探し出した。けれどこの異常な空気にも係わらずどちらも姿が見えない。

どうやらこちらの予測もあたってしまったらしい。

「こんな非常時に暢気な」

護衛のひとりが悪態を吐くが、ユーニスが若旦那と一緒にいることを知ってるクルヤの顔色は優れない。

「俺が様子を見てくるよ」

寝惚けるなどはユーニスに言っているけど、寝惚けていたなら嫌だな。

後が面倒だ。

最悪の状況を考えつつ、俺は止血効果のある薬の配分を思い浮かべながら若旦那の馬車に向かった。

＊

馬車から聞こえてきたのは、くぐもった呻き声。

苦痛によるそれじゃなく、口をふさがれたためのものだと判断できて、少しほっとした。

「ユーニス、入るよ」

声をかけ、返事を待たずに中に入る。

そこにいたのは血のにじんだ腕を押さえた若旦那と、毛布に包まれその上から縄で縛られた秘書。それからまだどこか惚けとした表情を浮かべ抜き身の剣を下げたユーニス。

本来なら怪我人を優先して治療するべきなんだろうが、俺はユーニスを優先する。

スカツとする香草のエキスを練りこんである飴を取り出し、ユーニスの口に放り込む。眠気醒ましか気分転換に使われるそれとは違う、ユーニスのために特別に調合したスカツを通り越して刺激的なそれ。

「ユーニス」

「……ああ、ニツク。俺……っ」

ようやく目が覚めたのか、俺に何を頼まれていたのか思い出してユーニスは慌ててあたりを見回した。

そして床でふごふごと芋虫のようにのた打ち回る秘書を見つけ、

ほっと胸を撫で下ろした。

「よかったあ、殺してない」

ユーニスの目覚めは普通に起きるなら悪くはない。むしろ良いんじゃないかと俺は思う。

だが寝てるそこに殺気を向けられると途端、悪くなる。そのうえ、寝ぼけたまま殺気を向けてきた相手を無情にも切り捨てる。

だから言葉と俺はわかっているが、知らない人が聞いたなら正気を疑われそうな言葉だな。

「例え殺していたとしても正当防衛だっただろうから気にとめるな。そんなことより、外を頼む。

数は五十二、もう半刻もしない内に襲って来るだろう」

「了解」

なぜ俺が数を知ってるのか、襲撃の時間を知ってるのか。

どう考えても知るはずのない情報を告げたにもかかわらずユーニスは気にした風もなく、荷物と共に隅に立てかけてあった剣を持って馬車を出ていく。

それを見送った後、未だもごもご呻いている秘書を無視して若旦那の脇にしゃがむ。

「止血は問題ないね。

出血量もさほど多くないから……神経は問題ないかな」

背囊から最新式のランプを取り出し灯りをともすと、若旦那の手を外して袖を切り裂いて傷口を覗き込む。

ついでに床に転がる血のついた短剣に視線を向けた。

心臓をひと突きするつもりだったのか、真新しいもの。手入れのされていないものでないし、妙な色をしていないから毒の心配はないだろう。

それでもと、念のため殺菌効果のあるフェニ草をトリヤ草とブフ草の軟膏に多めに加え、乾燥させたルセニ草の葉に塗りつけ傷口に貼り付けた。

そしてそれを切り裂いた袖で縛りとめる。

「ニック君？」

染みたのか、表情をこわばらせた若旦那が俺に怪訝そうな表情を向けて名前を呼んだ。

まあ、そうだよな。

ユーニスの事情と素性については説明したけど、俺については何も説明しなかったし。

王都に行くユーニスに、別の用事で王都に行く俺がついていってるとでも思ってたんだろう。

「トリヤ草とブフ草の軟膏にフェニ草の軟膏を加え、それをルセニ草に塗って貼り付けただけだから。

もう少し深い傷なら縫った方が治りがいいだろうけど、この程度なら薬で十分だと思う」

広げた道具を手早く片づけ、ランプの光を落とす。傷口を確認するのには明るくないと駄目だからつけたけど、燃料代もばかにならないし。

背囊に詰め終えユーニスの荷と一緒に担ぐと、俺は立ち上がって若旦那を見下ろした。

「もう暫くすると賊がこの商隊を襲う。馬車を出て、護衛の指示に従って欲しい」

「賊が？」

「この新月闇に紛れて襲撃するよう、手引きしてたおっさんがいたからね。」

その騒ぎに乗じて若旦那の殺害を試みるつもりだったみたいだし」

芋虫は黙りこの場から逃げようと這いずっていたが、俺はそれを足で踏みつける。

「あんたの動機なんて興味がないけどね、今問題が起こるとユニースが困るんだ。」

世話になった商隊の若旦那が殺された？

心優しく正義感の強いユニースがそれを気にしないはずがないし、そうなればかわらなくていい店のごたごたに巻き込まれることになる」

大方、人の良い旦那の目を盗んで店の金でも着服してたんだろう。若旦那の性格や、話を聞いた限りだけでもそれで間違いないと思う。

「俺はユニースのように優しくないんだ。」

王都にこのまま連れてってやるから、今まで得た全てを失って惨めに生きるといい」

気持ち踏み付ける足に力を込め、笑みを浮かべてやる。

華やかで柔らかな印象のユニースと対照的に、俺は地味な顔立ちで目も髪も黒に近くどちらかといえば冷たい印象を与える。意識して笑うと、酷く冷淡にみえる笑顔を浮かべることは簡単だ。その証

抛に、芋虫は怯えたように震え始めた。

あまりよろしくない方向に俺が進んでる気がしたが……いまは置いておこう。

足をどかし、芋虫の胸元を掴んで身体を起こさせる。

そして生氣なく揺れるその目を睨むように見る。

ああ、この目は良くない。非常に良くない。

なんでこのおっさんがこんなことをしでかしたのか、その理由のひとつがわかった気がする。いつからなのか知らないけど、間違はなく魔族絡みだ。

ひとつ大きなため息をつき、一度目を伏せてから開いておっさんの目を見る。

「ここにいれば、お前は消される。ここでお前を死なせてやるつもりはない。

——俺に従え」

最後は若旦那には聞こえないように声を落とし、だけど口調は強めて言う。すると生氣がないのは変わらないが、焦点は定まって俺を見ている。

これでよし、と。

「縛り直すから、暴れるなよ」

今度は若旦那に聞こえるように言って、それからおっさんの縄をほどいて毛布をほどいて……改めて縛り直す。手は後ろに適度の余裕をもたせて、ちよつとやそつとじゃ解けない方法で。

視界の隅じゃ、若旦那が何か言いた気に口を開け閉めしてる。

無視でいいかな？
面倒だし。

「なにか言いたいことでも？ 急ぎじゃないなら、後にして」

説明はユースに任せることにして、俺は背囊を背負いなおすとおっさんに繋いだ縄を引っ張った。

「立て、付いて来い」

素直に従ったおっさんに驚いたようだったが、若旦那も遅れて立ち上がった。

＊

火のところに戻った俺たちに、一様に驚いたような視線が集まる。原因は考えるまでもなく腕を怪我して青褪めた顔の若旦那と、縄で縛られているこのおっさん。

「坊ちゃま、大丈夫なのか？」

一番先に話し掛けてきたのはクルヤで、俺は頷くと事情を説明するため口を開く。

「ちょっと若旦那を殺そうとしたから縛っておいた。

今夜の賊の襲撃はこのおっさんの手引きだから、殺されないように気をつけたほうがいいよ」

俺の言葉にクルヤはなんとも間拔けな表情を浮かべ、俺と若旦那、それからおっさんを交互に見た。

「ちょっと待ってくれ。つまりなにか？」

その秘書のオルキさんが若旦那を殺そうとして、それを捕らえた。んで、これから賊がこの商隊を襲おうとしてると。しかもその賊はオルキさんが手引きしたと」

俺に尋ねたというよりも頭の中を整理するためにクルヤは呟き、それから頭を掻き筆った。

そのまま待つこと暫し、呻きながらしゃがんだかと思うと徐に立ち上がり、気合を入れる。おもむろ

「よし、分かった！ 賊と魔物をやり過ごしてから考えよう！」

むしろそれは何もわかってないんじゃないか、という無駄な突っ込みはしない。

気は分からなくてもないし。

「無茶はしないようにね」

ぐるりと見回りをしてきたらしいユニースが、周囲の状況無視で俺にそう声をかけてきた。

どう考えても、この状況じゃ心配されるのは俺ではなくユニースのはずだ。守られるだけの俺ではなく、実際に剣を振るって戦う。

「そっくりそのままその言葉を返すよ。」

軽い怪我なら治療してやれるけど、重いものになると厳しいから。分かってるよな」

村にいた時の調子で、幾針も縫うような怪我をされたら堪ったもんじゃない。

だから大丈夫と分かっているけど釘を刺すのを忘れない。

するとユーニスは緊張感なんて皆無の笑顔を浮かべた。

「どんな怪我でもニックが治してくれるってわかってるから、俺は剣を振るえるんだよ」

思わず惚けてしまうような笑みで、物語の騎士が守るべき相手に向けるような言葉をさらりとユーニスは言っている。

……あらぬ誤解をばら撒く前に、これも止めるように言うべきだろう。俺はユーニスの専属薬師になったつもりも、愛を囁かれるつもりもないんだと。

盛大なため息をついて、起こす時につかっていた飴をその口に放り込む。

刺激に思わず眉間に皺を寄せたユーニスに、冷淡といわれる笑顔を向ける。

「済ませてきたらみっちり文句を言ってやるよ」

俺が怒った理由がわからなかったらしいユーニスはあからさまに狼狽して、俺とユーニスの関係をやはり誤解したらしい周囲の視線に――俺は小さく嘆息した。

4. 怪我人と病人と

ひと言で表すなら、危惧するようなことは何もおこらなかった。

ユーニスがいて、ついでにクルヤやそこそ腕のたつ護衛の人たちがいって何か起こる方があり得ないわけだが、世の中に「絶対」はあり得ない。

手引きしたあのおっさんが、ちよつと普通じゃなかったからそれなりに心配したんだが……それは杞憂だったようだし。

「怪我をしたやつは、その怪我の大小に係わらず火の側に。
大事だいじないと思うが、見過おすごして大事だいじになってからじゃ困るからな」

詳細を吐かせるためにわざわざ生かして捕らえた賊から、獲物に毒を塗っていなかったと聞いてもやはり鵜呑みにできることじゃなく。

なぜかこの場を仕切ることになったクルヤの声にそろそろと集まる。

その大半が護衛の人たちで、ちらほらと奉公人の姿もある。おそらく賊との交戦に驚いたりで怪我したんだろうな。

「若旦那、怪我人の手当の指揮をお願いしても？」

「あ、はい。でも……」

交戦の間は落ち着かない様子で、怯えて震えていた若旦那。

奉公人に聞いた話じゃ、賊に襲われるのも初めてだってことだから仕方ないのかもしれない。

でも、クルヤたちが息のある輩を縛り上げていく時には随分と落ち着いてきてたはず。

落ち着いたら何か心配事でも思い出したとかか？

「実は、この一行でまともに治療の心得があるのはオルキのみなんです。」

腕もかなりのもので、オルキがいるならと他はつれてこなくて……」

なるほど。それであれば、あのおっさんが手遅れだと判断したら周囲も認めるな。そこまで考えて同行者を選んだのだとしたら、アレのせいだけじゃないのかも知れない。

厄介だなあ。

「でも、あんたもそれなりの知識はあるんだろ、若旦那？

その腕の治療をしたのはあんた自身なんだろ？」

クルヤは頭が痛いとしてもいいかげんな表情を浮かべ若旦那に問うが、若旦那は「商いをする程度の薬の知識はありますが、治療となると……」と言葉を濁し、それから俺を見た。

仕方ないか。

「俺がするよ、こう見えても薬師の駆け出しだからね」

王都まではまだ距離がある。

次に何か起こった時に、どうしてあの時は治療をしなかったんだと責められるのは遠慮したい。治療出来そうなのが俺だけだとなればなおさら。

「言っておくが、俺はまだ半人前なんだってこと忘れないでおいでくれな」

完璧なものを求められても困ると前置きして、それからクルヤと若旦那を見ると、問題ないという風に頷きが返ってきた。
なら、気楽に行こう。

「若旦那、この隊商の薬箱を。さすがにそれほど多くの持ち合わせはないから。」

クルヤは怪我人を外傷の軽傷者とそれ以外とに分けて。転んでついたような外傷で、なおかつ軽傷なら俺じゃなくても治療は出来るだろうから。

ユーニスは俺の手伝いを」

小さく深呼吸して、それから指示を出すと三人は三様に動き出す。自分も怪我人である若旦那は近くを通りかかった奉公人に指示を出し、クルヤは火のそばに集まった人たちに声をかけていく。

「やっぱりニックはそうやって動いている方がニックらしいよ」

背囊から敷布を取り出し、そこに治療に使う道具を広げているそこでユーニスが嬉しそうにそんなことを言った。

付き合いが長いだけのことはあって、意味は通じた。

俺としても、策を練ったりなんてのは俺の柄じゃないと思う。

俺の希望としては、村で自分のための畑でも耕しながら村の薬師をやってほしいと思ってる。

そうもいかないのはわかってるが、希望を持つくらいは構わない

だろう。

「俺もそう思う」

笑い返したそこに、奉公人のひとりが薬箱を持ってきた。

中身を確認して――極々普通の薬箱だと判断して、これなら問題ないと治療に移ることにする。

「それじゃあ、傷の重い人からこっちに連れてきて。」

軽傷者はユーニスが見るから、そっちも順に」

今じゃ傷ひとつ負わずにおじさんと打ち合いをするユーニスだけで、習い始めの頃はそれなりに怪我也した。

当時は深い裂傷はじーちゃんが治療して、軽い怪我は俺が治療。次第に怪我全部が俺の治療になって、どんな治療をしてるのか――薬草は何を使うんだとかを、ユーニスに聞かせながら治療するのが日課だった。

だからユーニスでも軽い怪我なら問題ない。

「賊と揉みあった時に、賊の短刀にやられたんだ。」

……坊ちゃま、本当に大丈夫なのか？」

護衛のひとりが俺の前に座り、怪我の状態を言うなり……軽口を叩いてくれた。

怪我は二の腕、短刀に寄るもの。血はそんなに出ていないようだし、傷口も毒で侵されていることもなさそうだ。その手も問題なく動くようだし。

普通なら薬を塗って自然に傷が治癒するに任せて問題ない程度の

それ。だけど今回は――、

「坊ちゃま言うな。

傷が心持ち深いから、自然治癒を待つより縫った方がすぐに仕事が出来ていいだろう」

「げ。

それって俺に対する嫌味かよ、坊ちゃま！」

「そんな面倒なこと誰がするか。

自然に傷がふさがるのを待つなら二週間、縫えば一週間。それが薬師として剣を振るえる許可を出せる時間。お前らなら後者を選ぶだろ？」

「……よろしく願いします」

護衛を仕事にする人にとっちゃ、剣を振るえないなんてのは食えないってこと。

だからか、説明した俺にスッパリ態度をひっくり返したそれはすがすがしいほどだ。

傷口を消毒し、神経を鈍らせる薬をその周囲にぬる。

「ユニス、五分くらいしたらこっち手伝って。縫うから。

薬が効くまでそこで座って待っててくれ。それじゃあ、次」

その間、時間が無駄にするのもと待っていた次の人に声をかけた。

＊

新月闇の襲撃から早三日。隊商はなににもなかったかのように装ってサヴァに向い、サヴァまで半分というところまで進んでいた。

これも、賊の襲撃で重症を負った者がいなかったからだだろう。もともと賊を乗せているから人数は増えているし、歩みも遅くなっているが。

若旦那はまだ鈍い痛みはあるものの、傷はふさがりかけている。首謀者のおっさんと生き残った盗賊たちは薬で眠らされ大人しく荷台でゆられている。その他軽い怪我を負った人たちも快癒に向かっている。

ともなれば、いつまでも引き摺ってなんていられない。

あと俺に出来るのは傷口が膿んでいないか気を配り、患部を清潔に保つ手伝いをする程度。

「俺が許可を出すまで腕を酷使するなと言ってるだろ」

ついでに無茶をしようとする怪我人を止めることくらい。

こそこそと俺の視界から消えようとした男――ミーゴに笑顔で声をかける。その手にはクルヤに頼んで取り上げたはずの長剣がある。

「げ」

長剣を背中に隠し、後退るミーゴとの間を詰める。

一日動かさないだけで身体が鈍るのはわかる。だから無理をしないという条件で基礎訓練は認めている。

だが長剣を振り回すなんてものは以ての外だ。

思い思いに休んでいた人たちから笑いが漏れる。

不本意なことだが、ミーゴとのこのやり取りは襲撃の翌日からの恒例となってしまうていた。

もし何かあった場合を考え、ミーゴには鎮痛剤を飲ませた。それがまずかったのか、痛みを殆ど感じないのをいいことにこの馬鹿は剣を振るおうとしたのだ。

有事であれば黙認もするが、そうでなければ到底無理な話だ。

「で、でもよ、坊ちゃん」

僅かに修正されはしたがそれでも不本意な呼び名に、俺は無言で半開きになってるその口に飴を放り込む。

ユーニスを起こす時に使うアレだ。

当然、ミーゴは呻き声をあげ動きを止める。

その間に俺はミーゴの背後に回って長剣を奪い取った。

まったくもって油断も隙もない。

「今回の件での保障はきちんとしてくれるって、若旦那は言ってくれてるんだから大人しくしてろよ」

「まったくだぞ、ミーゴ」

馬鹿馬鹿しいやりとりで他の護衛から声がかかる。

怪我がなかったか、軽い怪我だった彼ら。普段通りに仕事をする彼らからすれば、ミーゴはうらやましくもあり哀れでもあるんだろう。

「とにかく、次やったら王都まで睡眠薬飲ませて連れってやるから。だからおとなしくしとけ」

それだけは勘弁してくれ。そう嘆くミーゴを無視してユーニスの隣に座ると、ユーニスは楽しそうに笑っていた。

＊

そろそろ出立するか。と、仕度を始めた時のこと。嘶き駆ける馬にさせるまま曳かせる馬車が、街道を駆け抜けていった。
俺たちが向かうほう——サヴァに向かって。

「なんだ、あれ？」

「あつぶねえなあ」

誰となく呟いた非難の言葉。

それは俺もそうだと思う。

だけど、ちらりと見えた御者台の男の様子が妙だった。

「ニック」

許可を求めるように俺の名を呼ぶユーニスに、どう答えていいものかと悩む。

誰彼構わず施しをするなど、善意をばら撒くなど言ったのは俺。

それはユーニスを守るための方便で、あれは多分、俺の領分。だから助けたところでユーニスに害はない。

「どうしたんだ、ユーニス？ 坊ちゃま？」

相変わらず俺を不本意な呼び方をするクルヤを一瞥した後、ため息をついてからユーニスを見る。

「俺の指示に従うなら。言う以上に係わることをしないなら。これが守れるなら俺が面倒を見る」

俺の言葉にユーニスは笑顔を浮かべると、立つ準備をしていた奉公人から馬の手綱を奪うように取ると、裸馬に飛び乗った。

「どうしたんだい？」

俺たちの普通じゃない様子に、出立の支度をしていた若旦那が声をかけてきた。

周りの護衛たちも俺とユーニスのやりとりを見守ってたくらいだから、普通じゃないのは見てわかったことだろうし。

「さっきの馬車をユーニスに追ってもらってる。たぶん熱病か何かに侵されて、僅かな望みをかけてサヴァに行くところなんだと思う」

一瞬だけだったが見えた、あの顔色から熱病であることは間違いないと思う。

さすがにそれが何からかかるそれかは判断できなかったが、死病と呼ばれるそれじゃないとは思った。

だからユーニスを追わせた。

「俺とユーニスはここでその人たちを治療して、それからサヴァに向かおうと思う。そこで別の隊商を探すとするよ。」

だから若旦那たちは、ユーニスに戻ったら馬を回収して先に行ってくれ。せっかく休ませた馬を疲れさせてすまない」

「ニック君！　いくら君が薬師の見習いだからと言って、薬草も道具もない場所でどうやって治療するつもりだ？

へたをすれば君たちも熱病にかかってしまう」

「薬草なら村から持ってきたものがあるから、たぶん、足りる。道具はなんとかなる」

それに俺はそんな軟弱な病にはかからないし、ユーニスも問題ないだろう。

安心させるためなら伝えるべきなんだろうが、さすがにこれ言うつもりはなかった。ユーニスはともかく、俺のことは特に。

「しかしっ！」

「ああ、そうだ。クルヤ、その馬鹿の怪我に塗りこむ薬を処方するからよろしく頼む。

傷は塞がりかけてるからって塗るのやめると治癒は遅くなるし、痕も残るから。忘れずに塗って清潔な布を巻いておくように。それから王都についたら適当な医者に行つて、抜糸するのを忘れるなども」

周囲の視線が痛い、仕方ない。

ユーニスが戻り次第彼らを出立させないとだし、あまり時間もない。

「他の人は傷を膿ませないようにだけ気をつければ大丈夫だから」

手早く塗り薬の調合を終えて、それを未だ戸惑ったようすのクルヤと若旦那に押し付けつつ言う。

「坊ちやま」

何か言おうとでも言う風にクルヤが俺を呼んだ、その時ユーニス
が連れ戻しに行った馬車の音が聞こえて背を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8143u/>

勇者な友人と××な俺。

2011年10月9日00時06分発行